



絆～ほんとうに大  
切なもの ⑥

<パブ版>

比良岡美紀  
(2005、2007、2012)



# 目次

皆様へ .....	1
(27) .....	1
(28) .....	2
(29) .....	4
(30) .....	6
(31) .....	7
(32) .....	8
奥付	
奥付 .....	12



皆様へ

『絆～ほんとうに大切なもの』パブー版 第6回です。  
俊彦たちが移動した先で、起こったことを書きました。

どうぞよろしくお願いいたします。

⑦はこちらから

<https://puboo.jp/book/47425>

⑤はこちらから

<https://puboo.jp/book/46552>

①はこちらから

( 2 7 )

理恵はいてもたってもいられなくなり、依子の両肩をつかんで言った。

「いい、依子。あなたのご主人は、あなたが出かけるときはいつも早めに帰宅して、いつあなたから連絡があってもいいようにしているの。それなのに、愛されていないなんて、どうでもいいなんて、あんまりじゃない。あなたは本当に大切にされているのよ」

ひと息ついて依子を見た。案の定、そんなはずはないという顔をしている。

ここまできたら、すべてを話そう——理恵は決心した。

「夕方待ち合わせしたときがあったわよね。あのとき、あなたの携帯にかけようと思って、間違っただけで家にかけてしまったの。そしたらご主人が電話に出て、そう教えてくれたのよ。ご主人がどんなにあなたのことを心配しているか、どうして分からないの!？」

「うそでしょ? なんで? だって、あの人は……」

混乱した様子の依子に、今度はやさしく語りかける。

「お家に電話してみたら? きっとご主人が出るはずよ」

依子は立ち上がり、店内の公衆電話で自宅の番号をダイヤルし始めた。

呼び出し音が鳴る。2回、3回……「はい、川端ですが」

その声は紛れもなく夫のものだった。その瞬間、依子の目から涙が溢れた。

「あたし、依子です。あなた……」

「どうした? 何かあったのか? 迎えに行くから、今どこにいるか教えてくれないか」

夫の言葉が依子の胸に突き刺さる。

「いいんです。あなた……」

依子は胸がいっぱいで言葉を続けられなくなっていた。理恵が代わって受話器を取る。

「松平です。すみません、言わない約束でしたけど、全部話してしまいました。依子には何も変わったことはありません。今ちょっと、胸がいっぱいみたいですけど」

( 2 8 )

依子の夫はそれだけですべてを悟ったようだった。

「ああ、いいですよ。僕のほうこそ言わないでくれなんて、不躰な願いをしてすみませんでした。依子が落ち着いて話せるようになったら、代わってもらえますか」

「分かりました。ちょっとお待ちください」

理恵は受話器を手で押さえると、その場にうずくまって泣いている依子に声をかけた。

「ご主人が代わってくれて。話せる？」

依子はためらいながらも涙をふき、立ち上がると、受話器を受け取った。

「もし、もし」

「こっちは大丈夫だよ。帰るとき電話してくれたら、駅まで迎えに行くから。夕飯でも一緒に食べよう」

受話器越しに夫の声を聞きながら、依子はあらためて、理恵の言葉をかみしめていた。ずっと前、理恵が言っていたように、大切なものは目に見えない。そして自分は、危うく大切なものを見失ってしまうところだった、と――。

依子は明るい声で言った。

「今から帰ります。今日はお友達より、あなたとお話ししたいですから。新しくできた洋食レストランに行きましょう。はい、はい、わかりました。駅でまた電話します」

受話器を置くと、依子は言った。

「色々ありがとう。理恵に何が分かるの、なんて言ってゴメンなさい。反省してるわ」

「いいのよ、そんなこと。早く帰って、夫婦水入らずで過ごしたらいいわ」

「うん、そうする。じゃあ――。あ、原田君たちに挨拶できないけど、よろしく言っておいてくれる？」

「任せて！」

依子は急いで上着を着ると、バッグを持って出口に向かった。ドアを開けたとき、俊彦

たちとすれ違った。

「ごめんなさい、お先に失礼します」

そう言うと、駅に向かって走り出した。その表情は明るく、喜びに満ちていた。

( 2 9 )

「さて、俺たちも失礼するか」

俊彦が戻ると、小西は誰にいうともなく言った。

「なんだよ、来たばかりじゃないか。それに、池田たちはどうするんだ？」

「なに？俺たちがどうしたって？」

声の主は池田だった。すっきりした顔で、俊彦を見ている。

「そういうこと」

小西は俊彦の肩をポンとたたき、マスターに挨拶した。

「ごちそうさま。会社のやつらにも宣伝しとくよ」

小西が出て行くのを見て、俊彦と一緒に戻った山岡も店を出る。

「じゃあな、俊彦」

次々に旧友たちが出て行く中、俊彦は理恵がまだ店内に残っているのを見つけ、とりあえずコーヒーをもう一杯、理恵と一緒に飲むことにした。

「松平さん、ここ、いいかな」

「ああ、どうぞ、原田君」

そう言って、理恵は読みかけの本に目を落とす。

俊彦は「散歩」に出かけて山岡と話したことを思い出していた。

二人は喫茶店から少し歩いたところにある、小さな公園のベンチに腰掛けた。公園といっても単にその一角が区切られていて、ベンチがいくつかと、ブランコらしきものがあるだけだ。日曜の昼下がりという時間のせいかな、ベンチにもブランコにも、子供の姿はなかった。

「懐かしいな、お前と二人でこうして話すなんて」

山岡はしみじみと言った。

「小西から聞いたんだらう？」

突然の質問に俊彦は面食らって「え？」と聞き返した。

「俺が川端さんに告白したってこと」

「ああ、うん。聞いた」

「俺のこと嫌な奴だと思っただらう」

「まあ、いい奴と思わなかったのは確かだな」

「そうか。俊彦らしいな」

フツと笑うと、山岡はタバコに火をつけた。一度吸い込んだ後、ふーっと煙を吐き出す。

「俺は、ずっと川端さんが好きだった。卒業してからもずっと。でも、そんな俺にも他に好きな女がいた」

「川端さんのほかに、か」

「ああ」

(30)

それは意外な告白だった。山岡は依子のことを思い続けているために独身なのだと、先ほどのパーティーで聞いたばかりだった。

「幼馴染みでな、志おりっていうんだ。卒業して故郷に帰って、久しぶりに会ったんだが、川端さんにそっくりなんだ」

「そっくり？」

「空気感が似てるんだよ。ずっと俺のことが好きだったって言うから、フラれたショックもあって、付き合うことになった。だが付き合えば付き合うほど、川端さんとは違う、って思ってたなあ」

そんなことが.....。

「お前は川端さんの代わりにはなれないって、事あるごとに言い続けてた。本当に悪いことをしたと思ってる」

山岡はまた、タバコを大きく吸い込み、煙を吐き出した。

「その彼女は今、どうしてるんだ？」

「死んだよ。事故で。でも俺が殺したんだ」

「なんでだよ？ 事故だったんだろう？」

「俺が原因を作ったんだ。俺があんなこと言わなけりゃ.....」

「どういうことだ？ 分かるように説明してくれよ」

山岡はゆっくりと立ち上がり、ベンチの反対側に置かれた灰皿まで歩いて行った。そしてタバコを消すと、俊彦の隣に戻って腰をおろし、話を続けた。

「5年くらい付き合っただけで結婚を考えるようになったんだが、川端さんのことが忘れられなかった。志おりも、自分を見ていないと分かっていたんだろ。俺に食って掛かって、いい加減あきらめろって言ったんだ。結婚しているのに、その奥さんを奪うつもりか、ってな。俺もカーツとして、お前に何が分かる、しょせん代用品のくせに、って言っちゃまった」

山岡はひと呼吸置いた。先を続けるかどうか、迷っているようにも見えた。

「それで？」

「そうしたら志おりのやつ、急に飛び出してどこかへ行っちゃった。さすがにまずいと思って、すぐ探しに出たんだが、そのときには、もう……」

もう……？

「トラックに、轢かれていた。即死だった。ブレーキを踏んだが間に合わなかったそうだ。しかも——」

山岡は嗚咽をもらした。

### ( 3 1 )

「志おりのお腹には子供がいた。まったく気づかなかった。あいつはきっと、子供ができたから、父親らしくなれと言いたかったんだろ。それなのに、俺は……」  
嗚咽が激しくなった。俊彦は黙って、山岡の隣に座っていた。

「いなくなって初めて分かった。俺は最初から、志おりのことが好きだったんだ。川端さんに惹かれたのは、志おりに似ていたからだ。だが気づくのが遅すぎた。俺は、大切な人を失ってしまった……」

こらえていたものが一気に噴出したように、山岡は声を上げて泣いた。俊彦は座っていらなくなり、立ち上がったが、山岡のようにタバコを吸うわけでもなく、ただその辺を行ったりきたり、ウロウロするだけだった。

こんなとき、俺はどうすればいいんだ？ だが何より、山岡はなぜ俺にこの話をするんだろうか？ 俊彦は頭の中で考えをめぐらした。だが結論は出ない。なおも行ったりきたりしながら、それとなく山岡の様子を伺うと、どうやら少しは落ち着いているようだった。

俊彦はベンチに戻り、「大丈夫か？」と声をかけた。

山岡は照れくさそうにうなずいて、すまなかった、と言った。

「なあ、俺に話したかったのは、そのことだったのか？」

「いや、そうじゃない。だが先に話しておかなきゃいけないことだったんだ。取り乱してスマン」

山岡は新たにタバコに火をつけ、口にすると、自分を落ち着かせるように煙を吐いた。

「俺が言いたかったのは、お前と、川端さんのことだ」

「俺と、川端さん？」

俊彦はびっくりしたように言った。

「ああ」

もう一度タバコを吸って、煙を吐き出すと、山岡は俊彦を見て言った。

「俺は、川端さんに幸せになって欲しい。そして、お前にもだ」

「俺にも、って、どういうことだよ」

( 3 2 )

「お前には妻子がいて、充足した生活を送っている。俺は愛する人を守れなかった。同じ道を歩んで欲しくないんだ」

「愛する人……川端さんのことか？」

「ちがう、俺にとって守るべき存在。つまり、志おりと、俺の子供だ」

あ——。

「お前だけじゃなく、お前のカミさんにも子供にも、幸せになって欲しい。もちろん川端さんにもだ。志おりと俺と、俺の子供の分までな」

志おりと俺と、俺の子供の分まで……。

その言葉を、俊彦は頭の中で何度も反芻した。

「なあ、さっき松平さんが目配せしていただろう？ あれは、何かの合図だったのか？」

「ああ。パーティーが終わるころ、松平さんから相談されたんだ」

「相談？」

「詳しい話は省略するけど、川端さんのことだな」

「川端さんの……」

山岡はうなずいた。

「小西の知り合いがやってる喫茶店に行くから、一緒に行って、ゆっくりコーヒーでも飲みながら話したら、と提案したんだ」

そうだったのか……。

「二人で話したくなったら合図してくれれば、別のテーブルに移るから、ってな。お前が来るのは予想してなかったが、折を見て行こうと思ってたし、まあ一石二鳥かなとは思ったんだけどな。ははは」

山岡の笑い声につられるように、俊彦もははは、と笑った。笑いながら、あらためて山岡に感謝した。自分は後先を考えず、成り行き任せだ、などと思っていたのが恥ずかしかった。自分の家族だけではない。依子の夫や、理恵ら友人たちも巻き込んでしまうところだったのだ。何より、依子を深く悲しませることになったかもしれない。

理恵にも山岡にも、そしておそらく依子にも、この十五年、いろいろなことがあったのだ。みんな幸せになってほしい。俊彦はこのとき、心からそう思っていた。

奥付

## 奥付

絆～ほんとうに大切なもの パプー版⑥

<https://puboo.jp/book/47360>

著者：miki-hiraoka

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/miki-hiraoka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/47360>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/47360>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.



---

絆〜ほんとうに大切なもの パプー版⑥

---

版番号の予定

{{-  
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---